

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：36301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380225

研究課題名(和文)近代日本の外交思想：『転換期の国際社会』を知識人たちはどう捉えたのか

研究課題名(英文)The Diplomatic Thoughts in Modern Japan: How did the intellectuals grasp the international society in change?

研究代表者

伊藤 信哉 (ITO, SHINYA)

松山大学・法学部・准教授

研究者番号：70389196

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：

研究協力者を含めると計14名の専門家が、3年のあいだに15回の研究会を関東と関西で開催し、それぞれの研究成果を発表のうえ、知見の交換を行った。対外的には、日本国際文化学会の全国大会で、2度の共通論題セッションを設定し、7名のメンバーがその研究成果を発表した。

さらに14名で18本の研究論文を執筆し、彩流社より『近代日本の対外認識1』『同2』として公刊し、さらにそれぞれのメンバーが千倉書房や吉川弘文館などから専門書を出版している。

研究成果の概要(英文)：The total 14 members of researchers had been engaged in this project, having 15 conferences held both in Kanto and Kansai areas for the past 3 years, making each presentation and exchanging opinions. The 7 members of us made presentations of the results of our research at 2 cooperative sessions in the annual congresses of the Japan Society for Intercultural Studies 2015 and 2016.

We published two books, The Perspectives on the External World in Modern Japan 1 and 2, from Sairyusha, which consisted of 18 chapters written by the 14 members of our project. In addition, some members also published their solo books based on our project from Chikura-shobo, Yoshikawa-kobunkan, etc.

研究分野：日本政治外交史

キーワード：日本近現代史 対外認識論 メディア史 政治外交史 日本思想史

## 1. 研究開始当初の背景

近代日本の実相に史学的アプローチを試みる場合、伝統的に以下の手法が採られてきた。すなわち政策実務の責任者でもある政・官・軍などの最上位を占める人々(エリート層)の言動が、現実の歴史にどう影響したか、史料に基づき明らかにする、というものである。

しかし近年、この伝統的な手法とは一線を画する、新たな研究方法も開拓されつつある。なかでも注目すべきは、当時の知識人(学者や言論人にかぎらず、一部の政治家や財界人、官僚、軍人なども含む)やメディアの言説に着目し、彼らの「国際社会や秩序に対する認識や構想」を究明する手法である。また現実に行き届かされた着想にかぎらず、いわば「未発」のまま終わった構想として、どのようなものがあったかにも注目する必要がある。

このような手法を採る代表的な研究としては、たとえば酒井哲哉『近代日本の国際秩序論』2007年があり、また山本武利らが編んだ岩波講座『帝国日本の学知』全8巻、2006年や、酒井を编者とする『日本の外交3 外交思想』2013年(いずれも岩波書店刊)に寄稿された論文の多くも、このような問題意識や研究手法を共有するものである。

本計画の代表者(伊藤)は、過去15年にわたり、近代日本人の外交思想について研究を続けてきた。主たる分析の対象は、20世紀の前半に活躍した評論家・米田實と、彼が言論活動の舞台とした、当時を代表する外交専門誌『外交時報』である。前者については1998年の論文「国際問題評論家の先駆・米田實」をはじめ、数本の論文や学会報告の実績がある。後者についても2011年に著書『近代日本の外交論壇と外交史学』を公刊し、この新たな研究手法の第一人者である酒井からも、高い評価を得ている(『国際法外交雑誌』110巻3号書評)。その後も2013年に論文「1920年代『外交時報』にみる日本知識人の対外認識」を発表し、さらに2013年9月の日本政治学会でも「世紀転換期の有賀長雄の対外認識」を報告するなど、着実に実績を積み重ねてきた。

## 2. 研究の目的

今回の研究では「20世紀前半(日清戦争後から1955年体制が成立するまで)の日本の知識人たちの外交思想のパターンや傾向、およびその変容の実像」を解き明かすことをめざした。具体的に明らかにしようとしたのは、以下の4点である。(a)「新外交」が登場する1920年代の前後で、日本の知識人たちの外交思想はどう変化したか。(b)1931-1945年の日本外交を思想面から支えたのは、どんな人々のどんな国際認識だったか。(c)敗戦や占領を機に、日本の知識人の外交思想はどう転換した(あるいは転換しなかった)か。(d)近代日本人の国際理解のパターンや傾向、そして、それらが時を経てどのように変化し、また変化しなかったの

か、換言すれば「近代日本人の外交思想の特色と、その時代を貫く共通性(連続面)および、時代ごとの特異性(断絶面)はどこにあるのか」という問題の解明である。

## 3. 研究の方法

もちろん、これだけ広汎で複雑な課題を、短い研究期間のうちに、独力で解明することは不可能である。そこで4名の研究分担者(萩原稔・中谷直司・平野敬和・武井義和)のほか、博士号と優れた著書を持つ9名の研究協力者(小宮一夫・服部聡・上田美和・鈴木仁麗・北野剛・種稲秀司・尾原宏之・畑野勇・大木康充)にも参加を求め、計14名による共同研究を展開した。その過程で、それぞれが強い関心を有する領域や主題、人物に光を当てることで、当時の知識人の外交思想の一面を明らかにすることをめざした。

研究は、基本的に各人が個別に遂行することにしたが、半年に1回程度、関東または関西にて研究会を開催し、全員がその時点での研究成果を報告し、意見交換を行った。また外部からのコメントを求めて、各人が参加する学会や研究会にて報告をおこない、聴衆からのコメントも募った。さらに研究期間が終了するまでに、14名全員がその成果を論文としてまとめ、彩流社より刊行する論文集『近代日本の対外認識』全2巻として、世に問うこととした。

## 4. 研究成果

上記の計画に基づき、2014年6月14・15日、11月8・9・29日、2015年2月14・15日、6月28日・7月12日・2016年3月15日・4月2日・5月15日・8月30日・9月3日・12月18日の15回にわたり、研究会を開催して、進捗状況を報告するとともに、意見と情報を交換した。

本研究の最大の成果は、上記の通り、彩流社から2015年と2017年に刊行した2冊の論文集『近代日本の対外認識1』『同2』である。これらには、プロジェクトに参加した14人が執筆した、計18本の論文が収められている。第2巻は刊行間もないものの、第1巻については、90に近い大学図書館に収められ、研究の参考に供されている(典拠:Cinii Books、2017年5月現在)。

また2014年と2016年には、日本国際文化学会の全国大会にて、共通論題セッションを開き、前者では伊藤・萩原・鈴木が、後者では伊藤・武井・大木・上田がその最新の研究成果を明らかにすることができた。

上記を含め、研究代表者の伊藤は、論文3本、学会報告2回を行った。また研究分担者と研究協力者の分も含めると、本プロジェクトの参加者は、次項以下に示した通り、3年間で図書7冊、雑誌論文6本、学会報告17件を成果として発表している。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

平野敬和、藤村一郎、田澤晴子、「大正デモクラシー」の再検討、日本思想史学、査読無、48号、2016、47 51

上田美和、あっても、なくても?、本郷、査読無、124号、2016、11 13

種稲秀司、満洲事変直前期の満蒙航空路開発問題：もう一つの満蒙問題、国史学、査読有、218号、2016、75 110

上田美和、書評「船橋洋一『湛山読本』」、週刊東洋経済、査読無、6638号、2016、104

上田美和、石橋湛山の「小日本主義」とは何だったのか、文藝春秋スペシャル、秋号、査読無、2015、52 57

伊藤信哉、外交論壇の新潮流：半沢玉城による『外交時報』改革、歴史評論、査読有、789号、2016、20 33

[学会発表](計 17 件)

上田美和、自由主義は戦争を止められるのか、第21回近代日本政治外交史研究会、2016年9月17日、上智大学(東京都千代田区)

上田美和、自由主義者と戦争、日本イギリス理想主義学会大会、2016年8月27日、共立女子大学(東京都千代田区)

伊藤信哉、国際問題評論家の対外認識：稲原勝治と米田実、日本国際文化学会第15回全国大会、2016年7月16日、早稲田大学(東京都新宿区)

武井義和、大村欣一・東亜同文書院教授の中国認識、日本国際文化学会第15回全国大会、2016年7月16日、早稲田大学(東京都新宿区)

大木康充、第一次世界大戦後における『文化主義』の登場とその展開、日本国際文化学会第15回全国大会、2016年7月16日、早稲田大学(東京都新宿区)

上田美和、清沢冽の対外認識からみる紛争融和策、日本国際文化学会第15回全国大会、2016年7月16日、早稲田大学(東京都新宿区)

上田美和、リベラリストの悔恨と冷戦認識：芦田均と安倍能成、同志社大学人文科学研究所研究会、2015年12月19日、同志社大

学(京都府京都市)

種稲秀司、外務省と国際連盟軍縮、安全保障問題：東アジア地域秩序概念誕生の背景、第25回近現代東北アジア地域史研究会大会、2015年12月12日、慶應大学日吉キャンパス(神奈川県横浜市)

平野敬和、石橋湛山のアジア論：吉野作造との比較を念頭に置いて、石橋湛山研究学会、2015年12月12日、立正大学(東京都品川区)

中谷直司、『新秩序』は形成されたのか：ワシントン会議(1921~22)をめぐる日米英関係の再検討、日本国際政治学会研究大会分科会B-1(日本外交史I)、2015年10月30日、仙台国際センター(宮城県仙台市)

平野敬和・藤村一郎・田澤晴子、「大正デモクラシー」の再検討、日本思想史学会、2015年10月18日、早稲田大学(東京都新宿区)

大木康充、大正期における「文化主義」の提唱：桑木巖翼の文化国家論を中心として、日本ピューリタニズム学会、2015年6月20日、青山学院大学(東京都渋谷区)

上田美和、リベラリストの悔恨と冷戦認識：芦田均と安倍能成、日本現代思想史研究会、2015年4月18日、早稲田大学(東京都新宿区)

種稲秀司、第二次幣原外交と普遍的国際主義：1929年中ソ紛争を中心として、日本と東アジアの未来を考える委員会・近現代研究会(招待講演)、2014年8月26日、都道府県会館(東京都千代田区)

伊藤信哉、有賀長雄の対外認識：日露戦争から第一次世界大戦まで、日本国際文化学会第13回全国大会、2014年7月6日、山口県立大学(山口県山口市)

萩原稔、右翼思想家の中国認識：満州事変から日中戦争直前まで、日本国際文化学会第13回全国大会、2014年7月6日、山口県立大学(山口県山口市)

鈴木仁麗、モンゴル認識の形成：財団法人善隣協会の活動を支えたモンゴル認識を中心に、日本国際文化学会第13回全国大会、2014年7月6日、山口県立大学(山口県山口市)

[図書](計 7 件)

伊藤信哉、萩原稔、武井義和、鈴木仁麗、上田美和、小宮一夫、種稲秀司、大木康充、尾原宏之、畑野勇、彩流社、近代日本の対外認識2、2017、482

米原謙、萩原稔、菅原光、宮村治雄、浅野豊美、出原政雄ほか、晃洋書房、「まつりごと」から「市民」まで、2017、240

上田美和、吉川弘文館、自由主義は戦争を止められるのか、2016年5月、222

中谷直司、千倉書房、強いアメリカと弱いアメリカの狭間で：第一次世界大戦後の東アジア秩序をめぐる日米英関係、2016、464

出原政雄、竹島博之、長谷川一年、萩原稔、施光恒、八木橋慶一、山本直ほか、法律文化社、原理から考える政治学、2016、224

伊藤信哉、萩原稔、平野敬和、中谷直司、鈴木仁麗、上田美和、北野剛、服部聡、彩流社、近代日本の対外認識 1、2015、355

出原政雄、萩原稔、赤澤史朗、平野敬和、望月詩史、長妻三佐雄、田中和男ほか、法律文化社、戦後日本思想と知識人の役割、2015、403

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.s-ito.jp/home/research/book2/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

伊藤 信哉 (ITO, Shinya)  
松山大学・法学部・准教授  
研究者番号：70389196

### (2) 研究分担者

萩原 稔 (HAGIHARA, Minoru)  
大東文化大学・法学部・准教授  
研究者番号：30399050

平野 敬和 (HIRANO, Yukikazu)  
同志社大学・人文科学研究所・研究員  
研究者番号：10571573

中谷 直司 (NAKATANI, Tadashi)  
同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員  
研究者番号：70573377

武井 義和 (TAKEI, Yoshikazu)  
愛知大学・東亜同文書院大学記念センター・研究員  
研究者番号：80647933

### (3) 研究協力者

小宮 一夫 (KOMIYA, Kazuo)  
服部 聡 (HATTORI, Satoshi)  
畑野 勇 (HATANO, Isamu)

種稲 秀司 (TANEINE, Shuji)  
北野 剛 (KITANO, Go)  
尾原 宏之 (OHARA, Hiroyuki)  
上田 美和 (UEDA, Miwa)  
鈴木 仁麗 (SUZUKI, Nirei)  
大木 康充 (OHKI, Yasumichi)